

# A-1

## イナリ・サーミ語の双数名詞句における一致について

長谷川 朝香

(東京外国語大学大学院総合国際学研究所 博士前期課程)

【要旨】イナリ・サーミ語<sup>1</sup>の一致形式には完全一致と部分一致の2種類があり、これらの一致の選択条件には主語名詞の有生性、特定性および語順が関係しているとされてきた。本研究では主語名詞が双数を示す文例に着目し、コーパスを用いて有生性と一致の選択との関連について定量的調査を行った。本発表で示すことは次の3点である: (i) 主語名詞句の意味タイプと一致の選択における関連性 (ii) 主語のとり格と一致の選択における関連性 (iii) 主語が人称代名詞である文例における、これまでに報告されていない新しい一致体系。

### 0. はじめに

イナリ・サーミ語の定動詞には人称・数に一致する完全一致と、数に一致する部分一致の2つの場合が観察されている(表1)。これらの一致体系の選択は、主語名詞の有生性、特定性および語順が関係しているとされてきた(Toivonen 2007; Morottaja and Toivonen 2016)。本発表では名詞句主要部の形式と有生性に着目し、これらの性質と一致との関連に対して書き言葉コーパスを用いた定量的分析を行った。

本発表で示す成果は次の3点である: (i) 主語名詞句の意味タイプに着目した分類と一致体系の選択における関連性 (ii) 主語名詞句のとり格と一致の選択における関連性 (iii) これまで報告されていない、主語が人称代名詞の文例における「3つの数対立を保持しながら人称が中和する一致体系」の提示(表2)。

表1: 先行研究(繫辞 *lede* の直説法現在)

		完全一致	部分一致
SG	1	lam	lii
	2	lah	
	3	lii	
DU	1	láán	láá
	2	leppce	
	3	lava	
PL	1	lep	láá
	2	lepped	
	3	láá	

(Toivonen (2007: 230) より発表者作成)

表2: 本発表での一致体系(繫辞 *lede* の直説法現在)

一致特徴		「数と人称」	「数のみ」	
体系		3つの数 3つの人称	単/双/複	単/複
SG	1	lam	lii	lii
	2	lah		
	3	lii		
DU	1	láán	lava	láá
	2	leppce		
	3	lava		
PL	1	lep	láá	láá
	2	lepped		
	3	láá		

本発表における例文・図表番号、和訳、文字飾り、グロス、例文略は特に断りのない限り発表者によるものである。表中のパーセンテージは小数第3位で四捨五入したものであるため、合計は必ずしも100.00%にならない。なお文字飾りは原則として以下の基準に従っている。

**太字:** 主語名詞句 下線: 主語名詞句と完全一致する定動詞 波線: 主語名詞句と部分一致する定動詞

### 1. 背景知識

イナリ・サーミ語では名詞と定動詞、所有接辞に対し数(単/双/複数)が形態的に標示される。ただし名詞において双数標示がなされるのは人称代名詞のみであり、人称代名詞以外で構成される名詞句主要部は次の3形式のうちいずれかをとり定動詞双数形と共起しうる: [複数形] [*kyehti* 'two'+単数形] [単数形+*já* 'and'+単数形] (Morottaja and Toivonen 2016: 20)。

<sup>1</sup> イナリ・サーミ語はウラル語族フィン語派東サーミ方言群に属する言語である。典型的には語幹に接辞を接続する膠着語であるが、接辞が語幹と一体化する傾向にあることから屈折語的性格を認める学者もある(以上庄司1989: 67より要約)。基本語順はSVOである(Toivonen 2007: 228)。

定動詞における一致体系は、完全一致と部分一致の2種である。完全一致では主語名詞句の数(単/双/複数)と人称(1/2/3人称)に一致する(1)。一方、部分一致では数(単/複数)のみで一致し、人称は中和し形態的に3人称をとる(2)。

(1) **Kyehti almaa lá-i-n meeci-st.** 完全一致

two.NOM man.SG.ACC<sup>2</sup> COP-PST-3DU forest-SG.LOC

「2人の男は森にいた。」

(2) **Riddo-st láá kyehti keedgi.** 部分一致

beach-SG.LOC COP.PRS.3PL two.NOM stone.SG.ACC

「浜には2つの石がある。」

(Toivonen 2007: 229-230)

## 2. 先行研究

イナリ・サーミ語の一致の選択条件に関しては、Toivonen (2007)、Morottaja and Toivonen (2016)、Valtonen et al. (2022) に記述が見られる。表3は先行研究をまとめたものである。なお表中の○は完全一致・部分一致の両方が起こりうるもの、△は完全一致のみ起こるもの、×は部分一致のみ起こるもの、—は記述がないものを示している。

表3: 先行研究まとめ (Toivonen (2007), Morottaja and Toivonen (2016), Valtonen et al (2022) より発表者作成)

	Toivonen (2007)	Morottaja and Toivonen (2016)	Valtonen et al. (2022)
有生(人間)	○	△	○
有生(動物)	○	○	×
無生	×	×	×
部分一致が出現しやすい条件	存在文・所有文 (主語が人間) 【非特定性】	存在文・所有文 (主語が3人称)	—
完全一致が出現しやすい条件	関係節 【特定性】	—	—
備考	主語が人称代名詞で部分一致が起こる場合、主語は動詞に後置	主語が3人称の存在文・所有文での双数形による完全一致は不自然	完全一致・部分一致に関する明確な記述なし

本発表では主語名詞句の有生性との関連に着目するため、以下に各先行研究における有生性の制約を概観していく。3つの先行研究において主張が一致しているのは、主語名詞句が無生である場合は部分一致のみが起こるということである。一方完全一致が起こりうる条件を対照すると、大別してその境界を有生/無生としている先行研究 (Toivonen 2007, Morottaja and Toivonen 2016) と人間/非人間としている先行研究 (Valtonen et al. 2022) がある。さらに Toivonen (2007) と Morottaja and Toivonen (2016) の記述を対照すると、Toivonen (2007) は主語が人称代名詞かつVS語順をとる時に部分一致が起こりうる(3)ことに言及している一方、Morottaja and Toivonen (2016) では完全一致と部分一致の両方が起こりうるのは主語名詞が動物であるときのみであるとしている。

(3) **Tun jieh lah ohtuu, tust lam/ lii mun.**

PRN.2SG.NOM NEG.2SG COP.PTCP alone PRN.2SG.LOC COP.PRS.1SG COP.PRS.3SG PRN.1SG.NOM

「君はひとりじゃない、君には私がいる。」

(Toivonen 2007: 232)

<sup>2</sup> 名詞が数詞を伴う場合の格標示について、1を伴う場合は単数主格、2-6は単数対格、7以上は単数分格をとる (Nelson and Toivonen 2000: 187)。

前ページに示した先行研究間の記述の齟齬を解決することを目的とし、本発表では完全一致と部分一致の選択に相関する主語名詞句の有生性を含む意味タイプについて、コーパスを用いた定量的調査を行うこととする。

### 3. 調査

#### 3.1. 調査概要

本発表では前節で記載した研究課題に関連して、主語名詞句が双数を含意する文例を対象とし、主語名詞句の有生性階層および完全一致・部分一致の分布を調査する。なお主語名詞句を双数に限定するのは、3人称主語名詞と共起する動詞の数標示が双数であるか複数であるかによって、どちらの一致が選択されているか判断することが可能であるためである。単数、複数の3人称主語ではそれが不可能である(1節表1を参照されたい)。

#### 3.2. 調査方法

コーパス調査を行う。使用するコーパスはSIKOR (Saami International KORpus) のイナリ・サーミ語の書き言葉コーパス (Aanaar Saami text)<sup>3</sup>である。

- (i) コーパスの Advanced (CQP ohcan) に以下の検索式 (a) - (e) を入力し、文例を得る。
- (a) [word="mu[oá]i|tu[oá]i|su[oá]i"] (人称代名詞双数形)
  - (b) [msd=".\*N\.Sg\.Nom.\*"] [word="já"] [msd=".\*N\.Sg\.Nom.\*"] ([単数形+já 'and'+単数形])
  - (c) [word="kyehti"] [pos="N"] ([kyehti 'two'+単数形])
  - (d) [word=".\*kyevtis"] ([単数形+kyevtis 'two things'])
  - (e) [word="kuohtuuh"] [msd=".\*N\.Pl\.Nom.\*"] ([kuohtuuh 'both'+複数形])
- (ii) (i) で収集した文例を一致の方法 (完全一致 / 部分一致) 別に手作業で分類し、主語名詞句の有生性を調査する。名詞句の有生性は、Dixon (1994: 85) の拡大有生性階層をもとにしたもの: [1人称>2人称>3人称>固有名詞>親族名詞>一般名詞 (人間名詞>動物 (animate) 名詞>無生物 (inanimate) 名詞] にそって分類する。

なお調査手順 (i) の検索式に関しては、原則として1節に記載した定動詞双数形と一致する名詞句主要部の形式に沿ったものである ([複数形] [kyehti 'two'+単数形] [単数形+já 'and'+単数形] Morottaja and Toivonen 2016: 20)。 (d) について Morottaja and Toivonen (2016: 20) に記述は無いものの、イナリ・サーミ語の文章中において名詞「2つ」(数詞2に名詞派生接辞-sがついたもの) に由来する[単数形+kyevtis]という主語形式は定動詞双数形と共起する例が一定数確認できるため、調査対象に含めた。(e) について、名詞複数形は定動詞双数形と共起可能であるものの、それ単体では数が不明確で一致の区別が形態上不可能である。そのため「両方」という意味を持つ kuohtuuh を伴わせることで、主語名詞で表しているものが「2つ」であることを意図した。

### 4. 結果

本調査では3309例を収集、分析した。主語名詞句と有生性との関連について、調査結果を以下の表4に示す。表4中の数値は主語を構成する名詞の最小単位を計上したものであるため、総文例数と一致しない。例えば [名詞Aの単数形+já 'and'+名詞Bの単数形] の場合、AとBは独立した1語として数えられている。

<sup>3</sup> トロムソ大学 (The Arctic University of Norway) およびノルウェー国内のサーミ議会により作成されたものであり、行政、宗教、ブログ、ノンフィクション、フィクション、新聞、学術、Wikipedia のテキストが 316,086 文収録されている。[最終更新日: 2021年11月8日]

表 4: 主語名詞句の有生性階層と一致

名詞句階層		完全一致	部分一致	その他	計
人称代名詞	1DU	816 (96.34%)	2 (0.24%)	29 (3.42%)	847 (100.00%)
	2DU	143 (98.62%)	1 (0.69%)	1 (0.69%)	145 (100.00%)
	3DU	925 (99.78%)	2 (0.22%)	0 (0.00%)	927 (100.00%)
	小計	1884 (98.18%)	5 (0.26%)	30 (1.56%)	1919 (100.00%)
固有名詞		40 (97.56%)	0 (0.00%)	1 (2.44%)	41 (100.00%)
親族名詞		278 (96.19%)	5 (1.73%)	6 (2.08%)	289 (100.00%)
人間名詞		206 (74.10%)	71 (24.74%)	10 (3.48%)	287 (100.00%)
動物名詞		255 (78.70%)	49 (15.12%)	20 (6.17%)	324 (100.00%)
無生物名詞		266 (24.25%)	503 (45.85%)	328 (29.90%)	1097 (100.00%)
計		2929 (74.02%)	633 (16.00%)	395 (9.98%)	3957 (100.00%)

表 4 に示した通り、典型的に人間を示す名詞 (人称代名詞、大半の固有名詞、親族名詞、人間名詞) が主語として最も多く出現しているのは完全一致の文例中であり、無生物名詞が最も多く出現しているのは部分一致の文例中である。動物名詞については 324 語中 255 語 (78.70%) が完全一致の文例の主語として出現した。さらに部分一致の文例において、固有名詞が主語名詞句となることはなかった。

次に主語名詞句の形式と一致の選択の割合を示す。名詞句主要部の形式が [人称代名詞双数形] や [単数形+*kyevtis* 'two things'] である文例は 98%以上完全一致が起こっており、[*kuohtuuh* 'both' +複数形] は 70.21%が完全一致の文例中に現れた。一方 [単数形+*já*+単数形] の形式を取る文例は完全一致が 48.04%、部分一致が 25.83%、「その他」の一致が 26.12%と、前掲の形式より完全一致の割合が低かった。[*kyehti* 'two' + 単数形] の文例はむしろ部分一致の方が出現頻度が高い (76.42%)。以下、先行研究と反するものとして、4.1 節では完全一致の文例中に主語として表れる無生物名詞について、4.2 節では完全一致・部分一致に当てはまらない共起体系である「その他」の文例について扱う。

#### 4.1. 完全一致の文例中の無生物名詞

先行研究で必ず部分一致となるとされた、無生物主語が動詞と完全一致したものは 266 語得られた。

(4) 2. **Säämi párnái+kuultuur+kuávdáš já**  
 NUM Saami.SG.GEN child.SG.GEN+culture.SG.GEN+center.SG.NOM CONJN  
**nuorái+lävdikodde+haahâ orni-v oovdâst**  
 youth.SG.GEN+committee.SG.GEN+project.SG.NOM organize-PRS.3DU ahead  
*čäällim+kišto sämi+párnái-d já nuorái-d.*  
 writing.SG.GEN+contest.SG.ACC Saami.SG.GEN+child-SG.ILL CONJN youth-SG.ILL

「2. サーミ子供文化センターと青少年委員会の計画は、サーミの子供と若者のための作文コンテストを推進する。」 (SIKOR: 新聞: 2009)

(4) の主語名詞句は「サーミ子供文化センター」と「青少年委員会の計画」である。これら 2 つの名詞に共通する性質は、人間によって構成されている団体、もしくはそれによって生み出されたものであるといえる。ここで、このような性質と完全一致の選択の関係の有無を調査するために、主語名詞句の性質に着目した分析を試みる。次ページの表 5 は、完全一致か部分一致となった無生物主語を意味タイプ別に分類したものである。なお表中の数字は見出し語の種類を数えたものであり、それぞれの語における出現数は考慮していない。

表 5 に示した結果より、植物名、(構成物が人間である) 団体名は完全一致の文例中で起こりやすく、抽象的な名詞は部分一致の文例内で起こりやすいといえる。他品詞からの派生名詞 (形容詞からの派生接辞 *-vuotá* や 数詞からの派生接辞 *-s*、動詞からの派生接辞 *-(e) m, -(eij) ee*: Valtonen et al. (2022: 22)) は、先述のものより出現頻度の差は僅かではあるものの、部分一致の文例中に出現する頻度の方が高い。

表 5: 各一致における主語となる無生物名詞の分類

性質	完全一致	部分一致
モノ	100 (61.34%)	240 (62.34%)
植物	16 (9.82%)	17 (4.41%)
機関	16 (9.82%)	10 (2.60%)
抽象	21 (12.88%)	81 (21.04%)
派生	10 (6.13%)	37 (9.61%)
計	163 (100.00%)	385 (100.00%)

ただし今回の文例は半数以上が「モノ」に分類されており、その他の性質の出現数が極めて少ない。さらにここでの分析に使用した基準のうち「モノ」「植物」「機関」「抽象」は意味的分類である一方、「派生」は形式的な分類であるため、分類基準が一貫したものではないという面もある。いずれにせよ、「モノ」や「派生」に分類された名詞を精査するためには、他の分類方法を再考する必要がある。

(5) について、主語名詞句は「要点」であるため (4) で示したような影響は考えづらい。一方この文例はコピュラ文であり、述部に着目すると、「1) 家の名称と..... 2) 生物学の語彙の.....」のように、番号を伴って要素の列挙が行われている。そのため、要素が 2 つであること、かつその要素に相関性があることが視覚的に標示されたため、完全一致が実現したという可能性がある。

(5) Čuákkim kyehti uáiviääsi lá-i-n 1) päikki+nomättäs-ah  
 conference.SG.GEN two.NOM main\_things.SG.ACC COP-PST-3DU NUM home.SG.GEN+name-PL.NOM  
 já toi jurgálem anaráškielâ-n, já 2) biologia+sänilisto  
 CONJN DEM.SG.GEN translation.SG.NOM Inari\_Saami-SG.ILL CONJN NUM biology.SG.GEN+vocabulary.SG.GEN  
 tärhistem.  
 checking.SG.NOM  
 「会議の 2 つの要点は、1) 家の名称とそれのイナリ・サーミ語への翻訳、および 2) 生物学の語彙の  
 確認であった。」 (SIKOR: 新聞: 出版年不明)

#### 4.2. 「その他」の文例

完全一致と部分一致のどちらにも当てはまらない文例が 217 例出現した。以下の文例において、主語名詞句と対応していると思われる定動詞は斜字で示す。なお (8) のような例のうち 180 例の主語は [単数形 +já+単数形] であった。

**1DU<sub>NP</sub>-1PL<sub>V</sub>: 2 例**

(6) ...ko muoi ooin-ij-m mottoom auto puátimin terminaál kuuvl...  
 CONJN PRN.1DU.NOM see-PST-1PL someone.SG.GEN car.SG.NOM come.ESS.CVB terminal.SG.GEN to  
 「...私たちはある人の車がターミナルに来るのを見て...」 (SIKOR: 新聞: 2008)

**1DU<sub>NP</sub>-3DU<sub>V</sub>: 27 例**

(7) ...muái áigo-i-n kárgá-đ škoovlá-st.  
 PRN.1DU.NOM plan\_to\_do-PST-3DU escape-INF school-SG.LOC  
 「...私たちは学校へ逃げるつもりであった...。」 (SIKOR: 新聞: 2018)

**3DU<sub>NP</sub>-3SG<sub>V</sub>: 188 例**

(8) Jiem haalijd et taat kielâ já kulttuur  
 NEG.1SG want.PRS.PTCP REL DEM.SG.NOM language.SG.NOM CONJN culture.SG.NOM  
 potkán mii suuvâ-st eidu munjin  
 cut\_off.PRS.3SG PRN.1SG.GEN kin-SG.LOC just\_now PRN.1SG.ILL  
 「私の一族において、この言語と文化が今私の手によって途絶えることを望んでいない。」  
 (SIKOR: 新聞: 2010)

## 5. 考察

### 5.1. 有生性

イナリ・サーミ語において「有生」であるものの範疇を考察すると、人間～動物が有生とみなされるのは調査結果から明らかである。加えて無生物名詞の中でも、団体名 (完全一致: 9.82% 部分一致: 4.41%) や植物名 (完全一致: 9.82% 部分一致: 2.60%) は比較的完全一致の文例中に現れやすい。そのため特に人間を構成物とした団体や、生物と非生物の間に位置する植物は、他の無生物名詞より階層においてより上位のものとしてふるまう可能性がある。

無生物名詞での完全一致の選択の一因としては文体による影響も考えられる。本発表で扱ったデータは書き言葉である。ここでイナリ・サーミ語では完全一致をとる方が好まれると前提にすると、特に書き言葉においては主語名詞句が双数であることが視覚的に明示されるため、定動詞双数形との一致が起りやすいと推測できる。例えば要素の列挙の例 (4.1 節 (5)) は視覚的明示性による影響を示すものである。

### 5.2. 名詞句主要部における格および数の形式

[*kyehti* 'two'+単数形] は部分一致が多く (76.42%)、[単数形+já 'and'+単数形] は定動詞 3 人称単数形との共起が多かった (26.12%)。まず [*kyehti* 'two'+単数形] について、数詞 2 を伴う名詞は単数対格形をとる (Nelson and Toivonen 2000:187)。ここで斜格主語が完全一致を引き起こしづらいとすると、主格形によって構成される他の名詞句主要部の形式と比べ部分一致の割合が高かったことから、名詞句主要部における格標示は一致に相関があると考えられる。[単数形+já 'and'+単数形] は *já 'and'* で接続されたそれぞれの単数名詞が定動詞と一致しているとするれば、定動詞 3 人称単数との共起の割合が高かったことへの説明が可能となる。

### 5.3. 一致体系

本調査では [1DU<sub>NP</sub>-3DU<sub>V</sub>] の文例が 27 例出現した。これは、主語名詞句で標示されている数 (単 / 双 / 複数) は保持されているが、人称は中和している例である。これを新たな一致体系と認定し既存の一致体系に組み込むと 1 節表 2 のようになる。有生性階層で上位の名詞句タイプであるほど完全一致が選択されやすいことは 5.1 節で述べた通りである。人称代名詞においてのみ 3 つの数の対立が維持される一致体系が存在することは「有生性階層が高いほど人称や数などの区別が保存されやすい」 (Croft 2002: 129-130) といった通言語的傾向とも矛盾しない。

さらに人称代名詞が主語である文例 1919 例における一致パターンの分布を確認すると (4 節表 4 参照) 「3 人称、3 つの数」 (1884 例 / 98.18%) > 「3 つの数のみ」 (27 例 / 1.41%) > 「2 つの数のみ」 (5 例 / 0.26%) > 「その他」の一致 (3 例 / 0.16%) となることから、より多くの対立を保った一致パターンがより高頻度で現れていることがわかる<sup>4</sup>。

最後に、イナリ・サーミ語の部分一致では、いずれの場合も 3 人称形へ収束しているという点が指摘できる。Toivonen (2007: 247-251) によると、系統の近いフィンランド語の動詞における人称・数標示は主格名詞にのみ一致し、斜格主語をとる存在文・所有文においては人称・数の中和が起きて、動詞は形態的に 3 人称単数形となる (default agreement) (9)。さらにゼロ人称文においても動詞は 3 人称単数をとる (Laitinen 2006: 211) (10)。

(9) *Koulu-ssa on uudet opettajat.*  
school-INE COP.PRS.3SG new.PL.NOM teacher.PL.NOM

「学校に新しい先生がいる。」

(Nelson 1998: 55)

<sup>4</sup> ただし本調査では 2 人称双数の主語名詞が定動詞 3 人称双数形と共起する文例が出現していないため、既存の一致体系と同等に扱うことには疑義が残る。この一致体系を認定するためには、主語名詞句が 2 人称双数かつ定動詞 3 人称双数と共起する文例の存在の有無を調査する必要がある。

(10) **Hampaa-t**      *täytyy*      *harja-ta.*  
teeth-PL.NOM      must.3SG      brush-INF

「歯は磨かねばならない。」

(Laitinen 2006: 213)

上記より、少なくともフィンランド語とイナリ・サーミ語においては、3人称形は他の人称形と比べてより中立的なものであるといえる。加えて斜格主語が動詞の人称・数の中和を起こすことは、前節にて指摘した [kyehti + 単数形] での部分一致の出現頻度の高さとの関連が考えられる。

## 6. まとめと今後の展望

本発表ではイナリ・サーミ語の一致について定量的分析を行った結果、次の3点の結果を得た。

(i) **[主語名詞の意味タイプの分類]** 人間～動物は完全一致を起こしやすい。無生物名詞でも完全一致は起こる。特に「植物」「人間を構成物とした機関」は完全一致、「抽象名詞」や「派生名詞」は部分一致が起こりやすい。

(ii) **[名詞句主要部の形式と一致の関連]** 数詞2により名詞が単数対格形となる [kyehti+単数形] は部分一致が、[単数形+já+単数形] は定動詞3人称単数との共起が最も多く見られた。

(iii) **[これまで指摘のなかった一致体系]** 人称代名詞の文例において、3つの数の対立を保持したまま人称が中和する一致体系の存在を指摘した。

類型論的観点からの今後の展望として、ウラル語族の諸言語や他系統の言語における一致の制約を調査し対照することで、通言語的な一致の研究に寄与することを目標としたい。

**【略号一覧】**ACC: 対格 / COM: 共格 / CONJN: 接続詞 / COP: 繫辞 / CVB: 副動詞 / DEM: 指示詞 / DU: 双数 / ESS: 様格 / GEN: 属格 / ILL: 入格 / INE: 内格 / INF: 不定詞 / LOC: 処格 / NEG: 否定 / NOM: 主格 / NUM: 数詞 / PFV: 完了 / PL: 複数 / PLN: 地名 / PRN: 人称代名詞 / PRS: 現在 / PSN: 人名 / PST: 過去 / PTCP: 分詞 / REL: 関係詞 / SG: 単数 / 1:1 人称 / 2:2 人称 / 3:3 人称 / -: 形態素境界 / =: 接語境界 / +: 語境界

**【参考文献】** Croft, William (2002) *Typology and Universals*. 2nd ed. Cambridge textbooks in linguistics. Cambridge, Cambridge University Press. / Dixon, R. M. W. (1994) *Ergativity*. Cambridge Studies in Linguistics 69. Cambridge: Cambridge University Press. / Laitinen, Lea (2006) Zero person in Finnish: A Grammatical Resource for Construing Human Reference, Marja-Liisa Helasuvo and Lyle Campbell (eds), *Grammar from the Human Perspective: Case, space and person in Finnish*, Current Issues in Linguistic Theory 277: 209-232. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. / Morottaja, Petter and Ida Toivonen (2016) *Some note on Inari Saami syntax and morphology DRAFT version, June 10*. / Nelson, Diane (1998) *Grammatical Case Assignment in Finnish*. New York: Garland. / Nelson, Diane and Ida Toivonen (2000) Counting and the Grammer: Case and Numerals in Inari Saami, D. Nelson and P. Foulkes (eds), *Leeds Working Papers in Linguistics* 8: 179-192. Leeds: University of Leeds. / Toivonen, Ida (2007) Verbal agreement in Inari Saami, Diane Nelson and Ida Toivonen (eds.) *Saami Linguistics*: 227-258. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. / Valtonen, Taarna, Jussi Ylioksi and Luobbal Sámmol Ánte (Ante Aikio) (2022) Aanaar (Inari) Saami, Bakro-Nagy, Marianne, Johanna Laasko and Elena Skribnik (eds.) *The Oxford Guide to the Uralic Languages* : 178-195. Oxford: Oxford University Press. / 庄司博史 (1989) 「サーミ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 『言語学大辞典 第2巻 世界言語編 (中) さ-に』 65-71, 東京: 三省堂.

**【調査資料】** SIKOR. UiT The Arctic University of Norway and the Norwegian Saami Parliament's Saami text collection, Version 01.12.2021, (<http://gtweb.uit.no/korp/>) [最終閲覧日: 2023年12月21日]